

1970年から2010年のハンガリーにおける虚血性心疾患死亡率の健康格差：age-period-cohort分析

グロー クリスティーナ¹、エシヤク イーハブ サラホ¹、馬 恩博²、高橋 秀人²、野田 博之³、磯 博康¹

¹大阪大学大学院医学系研究科社会医学講座公衆衛生学

²筑波大学医学医療系臨床試験・臨床疫学

³厚生労働省健康局がん対策・健康増進課、

目的

本研究の目的は、ハンガリーにおける主要な死因のうち、虚血性心疾患（IHD）死亡率の長期的な傾向を検討することにある。本研究では、ハンガリー全土ならびに首都（ブダペスト）と他郡の比較について、IHD死亡率のAPC(age-period-cohort)分析を行った。

方法

IHDによる死亡と人口センサスのデータは、ハンガリー中央統計局から得た。APC分析は、40~84歳を対象として5年ごとの9クラスとし、1970~2009年までの死亡を8期間に分けて、1886~1969年までの16コホートを構築した。

結果

年齢調整 IHD 死亡率は、男性では 1970 年から 1993 年、女性では 1980 年から 1990 年までは上昇傾向であったが、その後は男女ともに減少した。さらに、男性では 1991 年、女性では 1970 年以降は、首都の IHD 死亡率は他郡よりも低く、その差が 1990 年以降は増大した。年齢効果は、男性よりも女性のほうが大きく影響した。男性の時代効果は、1972 年~1982 年は増加し、その後は減少した一方で、女性は 1972 年~2007 年の間は一貫して減少した。首都での時代効果の減少は、男女ともに他郡よりも低かった。男女ともにコホート効果は 1890 年~1965 年の出生者で減少し、また、首都におけるコホート効果は、他郡よりも急峻に減少した。

結論

ハンガリーにおいて、特に首都以外の郡における IHD 防止のためのプログラムの必要性が示された。

キーワード：虚血性心疾患、死亡率、年齢・時代・コホート分析、ハンガリー